

2020年度 古事記読書会「弥栄(いやさか)の会」 第3回 報告書

開催日 第4土曜日 2020年6月27日(土) 読書会 9時半～11時半

開催場所 Zoomにて開催

参加者 11名(全て会員)

内 容

(1)参加者自己紹介

(2)朗読

阿部國治著・栗山要編「第二集 蓋結(うきゆい)」 Zoomを用いて全員で順番に輪読

(3)読後感

- 大国主命の須佐之男命による修行のうち「鎬矢取り」で、焼け野原にあって地下に潜って難を逃れた箇所が印象に残った。緊急事態にあっても、御霊しずめをして、また、他人(鼠)を思いやる心を忘れないことにより道が開けるのだと思った
- 「うきゆい」については、太古の時代からこうしたテーマが存在していたということにも驚きがあった。逆に、大国主命が女性関係においても誠実で一人の妻をひたすら大事にし続けたという話であれば、かえってヒーロー話で終わってしまうところである。古事記を通じて、大和魂を日常生活に生かそうというなかでは、こうした話も有っても良いと今日は感じる事が出来た
- 須佐之男命からの様々な難問を見事クリアし「さすが大国主命！」とスーパーヒーローぶりに感嘆…とここまでが前半。後半に進むにつれ、落差の激しさに耳がキーンとなってしまう「聖人君子の大国主命も、やはり人の子」と驚かされた。男性が浮気に走るまでの過程が妙にリアリティがあり、また須勢理比売が反省するクダリでは、比売の気持ちが理解出来ずなんとなく後味の悪い感情を抱いた
- 心に残った言葉①「心に愛しく思ひて寝ましき」。人の頭の虱をとる作業を例に、愛がなくてはできない作業を任せ、自分は安心しきって寝られる状態で待つ、という師匠と弟子の関係を教わった。親子・上司と部下・同僚・仲間・地域・企業と顧客、全ての関係がこういう状態になるために、私たちは修業を積まなくてはならないのだと思った
- 心に残った言葉②「つまどい(夫婦間)」。よい夫であるか、よい妻であるか、確かめ合うことと教わった。これもまた、長い修業が必要だと感じたが、必ずするというのではなく、そのようにするために最大の努力を払うともあったので、永遠に修行で終わるかもしれないが、それでよいと解釈した
- 「うきゆい」で、科学技術の本質的な役割が書かれていることに改めて気付いた。先人が命がけで積み上げてきたものの上に、私たちの生活が成り立っていて、現在でも同様な歩みがあるのだと思った
- 生き返って「麗しき男」になった大国主命を見て、須勢理比売は自分でも気づかず一目で恋してしまったのでは。生死を共にする覚悟の必要な状況で、さらに一途に好きになってしまったのでは。須勢理比売のことが少し身近に感じられた。が、大国主命は一人の妻を思うことに努力してほしかった
- 「うきゆい」については納得いかない部分が多く、さらに読み、あとがきを含め噛み砕いていきたい
- 「へみはらい」のあとがきに「その他どんなことでも、人間の工夫によって出来た生活の技術というものは、みんな尊い生命の犠牲によって生まれ出たもの」とあり、当たり前なことだが改めて実感した。我々の土木技術もそうである。また、女性の地位についても、男女雇用機会均等法制定に奮闘された赤松さん、高島屋初の女性取締役となった石原さん等先人の苦勞があり、今の女性の地位があ

- る。当たり前になっていることを、当たり前と感じずに、先人のおかげだということに感謝したい
- 前回のあとがきに「会得した者は、それを伝授していくことが大事」とあり、今回の「技術や思考を伝えていくのは生半可なことではない」に通じていると感じた。虱はさすがに無理でも、「背中をかきましょうか？」または「背中かいてよ」とお願いできる威厳と天真爛漫さを併せ持つ人間になりたいと思った。プロレスラーの木村花さんの逝去に重ね、人は嫉妬や妬みで人を傷つけるものだから、その人に非はなくても死なぬ修行は必要だし、先を行く者は、それへの対処を伝えることが重要だとも思った
 - 「うきゆい」における男女間スキャンダル。大国主命もいくらそういう状況だったとはいえ、いつの世も男は…と思わざるを得なかった。婚姻関係にあらずとも、やはり「つまどい」として、私はそうあるべき人間になれているか、求められている人間であるかということ問い続けることは重要と感じた。また、須勢理比売（調子に乗りやすい）になってしまわないよう気を付けなければと思った
 - 漢字の「精華」の意味が「成果」とあり、音が一緒だと熟語の成り立ちに思いをはせた。愛しく（はしく）、望けて（みさけて）等よく知っている漢字の昔の読み方が出てきて漢字は奥深いと感じた
 - 大国主命が何度も「生き死に」を繰り返すことについて、今後彼らの生死に関する条件を理解したい
 - 「妻とうまくいっていない」がなぜ口説き文句になり得るのか、長年の謎であった。また、妻としてのありようを問い続ける、夫婦のあり方を考える、ということは確かに意識的に考える価値がある
 - 近頃本を読んでも頭に入らなくて困ることがあったが、輪読はよい。これも勉強になった
 - 音読は小学生の時以来だが、自分の世界に浸れる読書とは一味異なる楽しさを感じた
 - 先人の犠牲によって我々の生活があること、また反対に、私たちの行動が将来の人々の生活の豊かさや快適さにつながることを考えると、身の引き締まる思いである。また、一人の人を思うことは容易いことではないからこそ、尊いことなのだろうと思った
 - 大国主命の名前が、突然色々変わることに一番驚いた。これは大国主命に持たせている仕事や目的で変えているのか、その時々性格を表そうとしているのか、いくつもの人格を象徴しているのか。因幡の白兔を助けた大国主命と、その後の彼とでは性格が違うように感じる。となると、大国主命は赤猪抱の時にやはり死んでしまったのでは。しかし「日本という国をつくる」という大目的、言い換えると、日本国民に対して天皇系による国家統一の正当性を示すという古事記編纂の大目的のためには大国主命が死ぬわけにはいかず、違う人物を次々と大国主命に仕立て上げて話を続けているのではないか、名前がコロコロ変わるの、実は全部違う人物だからなのではないか
 - 「うきゆい」については、「男は行く先々で妻を持てるが、女はそうはいかない」という歌から想像するに、一夫多妻というより、女系（母系）社会だったのかなと思った
 - 大国主命はどんどん進化していく。あきらかに性格の良い好青年から、心身ともにつらい目にあつて修行を積んで、見た目も素晴らしい男性に成長、が前章まで。阿部先生の古事記の大部分は大国主命の成長物語だと思う。一夫多妻は部分的には有り得るが、男女比がほぼ等しい社会では有り得ないので、一人の男性が多く女性と結婚できるのであれば、一人の女性とも結婚できない男性がいることになる。現在では男性の数の数の方が多いので、余計有り得ないし、時代背景もあると思う

【次回予定】

2020年7月25日(土)9時半～11時半。次回もZoomを予定

連絡先：参加申込方法：開催日の1週間前までに、下記の必要事項を記入の上、メールにてお申し込みください。

【必要事項】所属支部、氏名、緊急連絡先(携帯)

申込先：reading-circle@womencivilengineers.com (担当：小林)

以上